

思考力・判断力・表現力の育成のために

群馬大学

中村 敦雄

一 「言語活動」への困惑

平成二〇年に公示された新学習指導要領では「言語活動」というキーワードが登場した。このキーワードは、PISAに象徴される現時点でのグローバルなリテラシーへの接近を意図したものと理解できる。PISAの読解リテラシー (reading literacy) は、母語教育での「読むこと (reading)」に限定したのではなく、社会生活のあらゆる機会における多様なテキストを位置づけた提案であった。それが、学校という社会に位置づけた場合に、「あらゆる教科」におけるといった文言に置き換わったものと考えられよう。しかし、この「言語活動」ということばほど実践家を困惑させるものもないだろう。というのも、従来行われてきたあらゆる教科の学習において、「言語」を使わずに成立する教科は存在しないからである。音楽や美術等

の言語とは異なったコミュニケーション媒体を扱う教科であっても、鑑賞や表現といった行為は、言語なしには成り立たない。

むしろ次のように理解すべきである。従来、それほどはっきりとは意識化されてこなかった「言語」の用法について、その特徴を知るための示唆が「思考力・判断力・表現力の育成」である。わたしたちは思考力・判断力・表現力の育成というゴールを前提として、今までにもまして、意図的・目的的に授業実践に取り組む必要がある。

では、いったいどうすれば、思考力・判断力・表現力の育成は達成できるのだろうか。「言語活動の充実に関する指導事例集」(文部科学省) から手がかりを探っていこう。

二 「話すこと・聞くこと」の事例から

中学校第一学年の「『体験入部』の報告を

しよう (国語1)」は、「話すこと・聞くこと」における取り組みであり、「自分の体験を基に報告する内容を選んで話を構成し、話す速度や音量、相手に分かりやすい語句の選択などの知識を生かして話すことができる」ことをもって目標としている。中学校最初の学校生活における実の場の経験を学習に取り入れた、有効な実践である。

学習者が体験入部で得た情報を報告メモにまとめ、ペアで、さらにはグループで報告し合う機会を持つのである。この実践では、話し手だけでなく、聞き手にも課題を与え、相互に高め合っていく学習が構想されている。すなわち、ペアの相手には、「適切な速度や音量」であるかに、それ以外の者は「内容の分かりやすさ」に注意して聞かせ、フィードバックを行わせている。

大変に工夫された構想であるが、残念ながら、提示されたワークシートでは、もっぱら「適切な速度や音量」やアイ・コンタクトといった「外言」を中心とした内容が目立つ。中学校第一学年にふさわしい展開があったものと思われるが、その点への言及が弱いので、推論しつつ補っておきたい。ここで大事にすべきは、むしろ、「内容の分かりやすさ」である。とりわけ、「思考力」に関わって軽視してはならない点である。

ワークシートの最後の部分に、「練習内容は三つだけ話して……」とある。おそらくはナンバリングを指すのであろう。ナンバリングを意識することは、「内言」に関わって、何をどうすれば分かりやすいか、選択的な思考を働かせる機会を学習者に提供する。さらには、メモに記した順にただ話すのではなく、聞き手の知識や興味に応じて順番等を工夫する必要も学習すべき項目である。

三 「読むこと」の事例から

次に、中学校第三学年の『走れメロス』を読んで批評する(国語14)を取り上げる。この実践では、「批評」というキーワードが使用されている。ご存じのように、こちらも新学習指導要領から登場したものである。従来の文学教材を扱った学習の場合、読みを深めて感想を出し合う学習は一般的に行われてきた。しかし、それが「批評」となったことで、要求水準が精密化したのである。

この実践で注目すべきは、「すばらしい・分かる・大事」等といった「批評する際に用いる語彙」をあらかじめ明示させておくことで、自分の批評に役立てようとする手立てが図られている点である。

学習者の反応としては、「メロスの言動に関して」が40%、「登場人物の設定や言動に

関して」が30%であったようで、従来の実践とほぼ同様の反応があったことがうかがえる。しかし、そこに「批評する際に用いる語彙」があったことで、批評としての精度が高まったことが予想される。批評という、具体的なジャンルに応じた手立ては、記録や報告といった他ジャンルの学習活動にあっても等しく必須である。

おそらくは紙幅の制約なのであろう。学習者の反応の多かった「メロスの言動」を批評するには、例示された「批評する際に用いる語彙」だけでは明らかに不足している。言動をもとにして人物像に迫るための「語彙」を何らかの方法で共有できる手立てがあったのではないだろうか。いったいわたしたちは、そうした「語彙」をどこから求めたら良いのだろうか。ひとつの答えとして、類語辞典の使用を紹介したい。多くの英語圏の教室では一般的な辞書とともに類語辞典が備え付けられている。類語辞典を引くと、その語と似た意味や関連した意味の語が体系的に掲載されており、「語彙」の点では強力な補助手段となつて、ひいては「表現力」の育成についても資することが期待できよう。

さらに、「内言」に関わって、「批評する際に用いる語彙」や類語辞典で得た語が、自分の伝えたい反応を効果的に相手に伝えている

のか、「判断力」を働かせて確かめる学習経験が不可欠である。

四 思考力・判断力・表現力の育成

以上、事例集に掲載された実践事例に即して、ポイントを確認してきた。言語活動をとおして思考力・判断力・表現力の育成を行う場合、ともすれば、関心が「外言」に偏りがちである。しかし、ここまで述べたように、「内言」と両立させることで深まりのある実践へと充実させることが可能である。また、学習の手順を明確にすること、「批評する際に用いる語彙」のような手立てを事前に可視化させることは、学習者にとって有益な方策をつかむことにつながるだろう。

実践前に、教師側がどれだけ、実践の展開や学習者の反応、さらには育成を目指す言語能力について「見えて」いるかが鍵である。

なかむら あつお 群馬大学教育学部教授。著書『言葉の力を育てるレポートとプレゼンテーション』(共著、明治図書)等。